

タマネギの仔球栽培に関する研究

第1報 冬採り栽培の品種適応性について

川崎重治・斉藤久男

(佐賀県農業試験場)

KAWASAKI, S. and SAITO, H.

Improvement of the Cultivation Systems of Onion Using Dry-Sets

(I) On the Varieties Suitable for Winter Groping

タマネギの仔球栽培は流通面と土地の高度利用から期待されているが、冬採り栽培では年内収穫率の変動が大きく、作柄が不安定である。これは品種選定や施肥など耕種技術面の不備によるものであって、その改善を図る

ため昭和45年から試験中であるが、品種の適応性について報告する。

試験方法

1. 供試品種と耕種概要

項目	昭和47年	昭和48年
供試品種	冬採り黄、大阪さきがけ、貝塚早生(福永系)、*長交OA黄	輝交139、試交140A・B 試交141A・B、冬採り黄
仔球養成	は種日 3月17日 仔球採収 5月19日、 5月25日、*5月25日、5月30日、常温貯蔵	は種日 3月1日 仔球採収 日13日/5月 常温貯蔵
植付け日と仔球	9月7日 球重5~6g、球径1.5~2.0cm	9月1日 球重5~6g、球径1.5~2.0cm
栽植様式	うね幅 1.5m 4条植、株間 10cm 植付け後切わらマルチ ポリマルチ 昭和48年	昭和47年、植付前シルバー
施肥量	成分量 N-1.0、P ₂ O ₅ -1.0、K ₂ O-1.0kg/a	

試験結果

1. 9月上旬植の場合、発芽や生育について、品種間差は少ないが、冬採り黄などにみられる早熟株は生育が劣り、4~6枚で結球するので葉面積が不足して球の肥大性が悪い。

2. 球の肥大は9月下旬ころからみられ、茎葉の倒伏は10月下旬~11月上旬から始まる。大阪さきがけや貝塚早生(福永系)、試交139号などが早く、しかも倒伏率は90%を越え、青立株が少ない。しかし晩熟型の長交OA黄はおくれ、茎葉の倒伏はみられなく、ほとんどが青立株化する。

昭和47年の完全球収量は全般的に低いが、品種間差が大きい。昭和48年の場合は、冬採り黄の300kg/aに対して試交139、同140、同141の各系統は500~600kg/aと高位収量が得られ、秋まき栽培と変らない生産力で、肥大性がよく、大球の占有率が高い。

3. 結球の遺伝特性の違う貝塚早生と大阪さきがけを用い、仔球の結球葉数と熟期や収量との関係を見ると、両品種とも2葉型仔球は生育や倒伏が早く、11月下旬60~70%倒伏するが、4葉型仔球はおそく、約40%余の倒伏で青立株率が増加し、貝塚早生で顕著であった。2葉型仔球は各部位の発育量が劣り、葉面積が不足するの

で、球の肥大は不十分であるが完全球収量が多い。一方4葉型仔球は生育がおう盛で球重は増加するが、青立株が多く完全球収量は減った。すなわち、2葉型仔球は早熟型で結球性が安定するので、仔球選抜手段として有効である。

4. 仔球の採収時期については、長交OA黄を除く各品種とも、5月15日に採取した仔球は結球性がすぐれ倒伏率が高いが、5月25日に採取した球は結球がおくれ倒伏率は低下して、青立株率が著しく増加する。とくに冬採り黄や貝塚早生などの品種でその差が大きい。したがって、仔球の採収時期は既報のとおり5月中旬までが適当で、早生の結球特性をもつ仔球の選抜が可能で、とくに純度の低い品種ほど顕著な効果がみられる。

5. 冬採り栽培時の結球生態は秋まきの一般栽培とは異なり、栽培の成否は品種の結球特性によって決定され、結球肥大性は品種選定の基本条件となる。本栽培に適用できる品種は既存品種ではきわめて限定されるが、大阪さきがけや試交139号、同140号、同141号、貝塚早生(福永系)の各品種は冬採り黄以上に安定し、利用できることを確認した。なお、仔球の採収期は5月中旬が限界で、純度の低い品種ほど注意しなければならない。また結球葉数も仔球選抜の一手段として考慮する必要がある。